特選ブログ
shin1さんの日記
Vol.54

人間牧場主・年輪塾々長
若松　進一

森林資源活用で地域の未来を伐り拓く

クワガタやカブトムシといった昆虫に夢中になった少年時代の思い出は、大人になった今でも忘れることができない淡い人生の一コマです。しかし時代は大きく変わり、私たちの暮らしから自然が遠のき、子どもたちの遊びも巣ごもり傾向となって、自然の中にいるはずのクワガタやカブトムシは今、ペットショップの網囲いの中となってしまいました。

そんな自然環境を知らない子どもたちに、クワガタやカブトムシ飼育を通して人間性を培ってもらおうと、四十歳を超えた私の長男息子が夏の暑い朝、早起きしてクヌギの森に仲間とともに分け入り、捕獲したクワガタやカブトムシを雄雌一対ずつ虫かごに入れ、夏休みに松山空港のロビーで子どもたちに無償で配りました。大きな植木鉢にクヌギの苗木を植えてディスプレイした会場に子どもたちが群がり、二日間で予定していた百五十箱の虫かごは全てなくなるほど大盛況でした。クワガタやカブトムシを自然の森で集めるには夜間早朝ゆえ危険や困難も多いことから、人間牧場に造っていた落ち葉ストッカーを使って、養豚業者さんの協力で幼虫を集め養殖を始めました。成虫確保のめどは立ったものの、今度はコロナ禍で空港ロビーが使えなくなり、配布場所を伊予市内の商業施設「町家」と「道の駅クラフトの里」に移して実施してきましたが、四年目の今年も無償配布を計画して準備をしました。

何年か前、宮城県気仙沼のカキ漁師さんが山に木を植えるという面白いニュースが飛び込んできました。畠山重篤さんが中心になって起こしたこの運動は、「森は海の恋人」という素敵なフレーズもあって環境を考える社会運動にまで発展し、東日本大震災という大きな試練に遭遇しながら、その価値はますます高まっています。私も何年か前、松山でのシンポジウムで畠山さんと一緒に登壇し、夕日の魅力について語りましたが、全く違った手法のこの二つがSDGsの十七の目標の一つである「14、海の豊かさを守ろう」と「15、陸の豊かさを守ろう」という二つをドッキングさせる「クヌギの森」を作る里山・里海活動にしようと三年前から動き始めました。

今、日本の里山は過疎化と高齢化によって耕作放棄地がどんどん増え、危機的な状況にあります。里海も同じで海岸線にはたくさんのプラスチックゴミが漂着し、白砂清松の松も松くい虫の被害に遭って見る影もなく、荒れるに任せています。そこで目をつけたのはドングリです。大きなクヌギの木は秋になると沢山のドングリの実をつけます。その落ちたドングリを拾い集め、プランターや畑に直播すれば、翌年には芽が出ます。雑草を取り除く程度の世話で、二～三年もすれば移植可能な五十㎝ほどの苗木になります。同時進行で耕作放棄地を開墾します。柔らかい下草が生えるようになるには二～三年かかりますが、苗木の生育と同時なので、三年目の春には植林ができるのです。クヌギの苗木は成長が早く、年に二回の下刈りをして育てれば、十年後には立派なクヌギの木が林、森をつくり、早ければ伐採まで可能だし、一度植林したクヌギの木は、伐採すると切株から新しい芽が出て再び太りだすという、

循環が生まれる優れモノの木なのです。

クヌギの木はシイタケ栽培のホダ木として、またクリーンエネルギーの炭として活用できる有用な山林資源ですが、四季の巡りの中で春に芽吹き、秋に紅葉した葉っぱは地上に落ちて大地を蘇らせる腐葉土となるのです。降った雨はこの腐葉土でろ過され、ミネラルたっぷりの栄養分豊かな水となり川を流れて海に注ぎ、沿岸の藻場や水性動物を育て、豊かな里海と里山の好循環を生んでいきます。

かつて私は自らが代表を務めるボランティア団体「二十一世紀えひめニューフロンティアグループ」が中心になって、「無人島に挑む少年のつどい」を二十年間にわたって行いました。その折無人島の砂浜に山のように打ち上げられたプラスチックごみの多さに驚愕しながら、海岸線に五百本のウバメガシを植えました。また里山の荒れるのを見かねて一か所百本の桜を地元住民とともに10か所植える「千本桜の森づくり」もやりました。今にして思えばこの二つの事業は今回の里山にクヌギの森を作る構想のプロローグとでも言うべきものだったようです。

森林資源活用には植林した木を大事に育て、高付加価値な木材として販売し財を富ませることが第一ですが、森林の持つ魅力は森を環境の循環場所として考え、水資源の保全は勿論のこと動植物多様性や遊びの空間として、積極的に利用することを考えなければなりません。そのためには未来を担う子どもたちを森に案内し、森が果たす環境浄化の役割と森の魅力を、遊びや育林体験を通してしっかりと伝えなければなりません。

人間牧場では耕作放棄地だった港の見える丘を開墾し、ドングリから育てたクヌギの苗木をとりあえずこの春、子ども体験塾の子どもと一緒に１００本植林しました。夏の暑い下草刈りなどを行いながら、毎年とりあえず１００本ずつ植林して行く計画です。10年で千本の植林は場所の確保や世話など容易ではありませんが、一緒に汗をかいたり理念に賛同する協力者を求め、小さな活動を運動にしていく計画です。

子ども体験塾でクヌギ苗100本を植林

とりあえず①ドングリと落ち葉を拾い集めドングリ銀行を作る。②ドングリの種を蒔きクヌギの苗を育てる。③耕作放棄地や空き地を探して開墾し、毎年子どもたちと百本単位でクヌギの苗木を植林しクヌギの林や森を作る。④クヌギの森で遊ぶプログラム（ドングリ遊び・カブトムシやクワガタなどの小動物・シイタケ栽培・炭焼きなど）を企画実施する。⑤里山と里海を結ぶイベントを開催し、活動を運動に広げるなど、楽しい夢は果てしなく広がります。こんな他愛のない話を周りの人にすると、「若松さん、貴方はなんぼまで生きるつもりなの？」と呆れ顔されますが、どうやらこの活動は私の最後の仕事になりそうです。

「ドングリを　拾い集めて　種を蒔く
小さな苗木　育てて植栽」
「耕作の　放棄地などに　クヌギ苗
植えて植林　環境循環」
「海と森　川が結んで　くれる縁　豊かな未来
子どもと一緒に　教えてくれた　繋がりを
「カブトムシ
小さいけれど　夢は大きく」
（若松進一の笑売啖呵）